

不器用

佐藤 るりか（神奈川県 フェリス女学院中学校 3年生）

はじめて人を殴ったときの気持ちをよく覚えていた。真っ白な肌に自分の拳がめりこむのを俯瞰で眺めた。気持ちがいい。脳にじつとりと快感が染み出す。でも床に転がった彼女はつまらなそうだった。「これで満足？」彼女は冷たく言う。私は彼女のそういうところが大好きだった。

「いいお友達なんだね。」

私の隣で毒々しい色のサイダーを飲むお姉さんは、私の話を全て聴き終えるとありきたりな感想を述べた。

「そう、いいお友達。」

飲む？と傾けられたサイダーを一口含む。やけに甘ったるい味がした。口の中でしゅわしゅわ弾ける。

「綾ちゃんは小学三年生なんだっけ？凄く大人びてるけど。」

「お姉さんの方が私よりもずっと大人だよ。」

私はお姉さんの腕に巻かれた包帯と額の絆創膏を一瞥する。「気になるの？」するとお姉さんはちょっと寂しそうな顔で言った。

「彼氏がね。うん、そういう人だから。」

「印？」

私が聞くと、お姉さんはぞんざいに頷いた。それから少し、首を振る。「存在意義かな。」目を伏せたまま、お姉さんはセーラー服

を捲つてみせた。「わあ」私は機械的な調子で口から言葉を垂れ流した。「すごく痛そう。」青く変色したあざのような傷が螺旋状にできている。それを一つ一つ、確かめるような手つきで触ると、お姉さんは暗示をかけるように呟いた。

「好きなの。」

足元を流れる川が、綺麗なせせらぎの音を奏でる。お姉さんもぼんやりそれを見つめているようだった。田舎で過ごす夏休みというのも、なかなか悪くないかもしれない。

私はもう一口サイダーを貰った。相変わらず舌が焼け付くように甘い。

「初恋の味だつて。」

パッケージをなぞって、お姉さんは言った。ただ甘いだけのこの飲み物を、このひとも初恋と呼ぶのだろうか。

「お姉さんの初恋もこんな味がしたの？」

私は足をぶらぶらさせて尋ねた。「それとも今の彼氏が初恋？」私は一層純真に見えるよう笑つてみせる。真っ白な入道雲の下、蝉の声はやけに大きく響いていた。

「どうだろう。」

お姉さんは、少し考えるように肩に手を置いた。私は知ってる。それは人が困ったときにする仕草だつてことを。

「すぐく、甘かった。」
嘘つき。

おとなは、すぐにわかる嘘をつく。
それを嘘だとわかっていないふりをして笑うことが、きつと子供の義務なんだろう。

「遅く。」

開口一番、帰ってきた私に母は言った。ちゃぶ台の私の座るところにだけ、ぼつんと夕飯が置かれている。おじいちゃんとおばあちゃんの姿は見えなかった。お母さんはこちらを見ようともしせず、あからさまに苛ついているのがわかる。

「ごめんなさい。」私は言葉を吐いた。「こんなに遅くなると思わなくて。」

「今何時だと思ってるの？何してたの？」

お母さんはこちらに顔を向け、眉間に皺を寄せた。暗くなる前に帰ってくればいいって言ったのはお母さんなのに。ねえ、まだ七時でしょ。外は明るいよ。お母さんの嘘つき。

そういう言葉をぐつと飲み込んで、虚ろな目のまま言った。「ごめんなさい。遊んでたら、時間を忘れちゃったの。」

「遊んでた？」お母さんは鼻を鳴らした。「それはこの前言ったお姉さんって人？」

「そうだけど。」

「この時間まで子供を拘束するなんて随分と常識がない人なのね。」

私はお姉さんの顔を思い浮かべた。その傷だらけの身体と壊れ物みたいな笑顔を想像し、目の前でくすんだ顔をしているお母さんを見る。楽しくなさそうな顔をしていた。

「もう明日からそんな変な人と会うのはやめなさい。だいたい今すぐに戻って帰って夏期講習を受けさせたいくらいなのに」

お母さんの言葉は、もう耳に入ってこない。おじいちゃんとおばあちゃんとお父さんは、きつと町内会のお祭りの宴会に行ったのだろう。だからお母さんは機嫌が悪いのだ。ここはお父さんの家で、お母さんの家じゃなくて、それなのに私の家だから。全部知っている。

私の教育方針についておばあちゃんと揉めているんだってこと、そしてお父さんは最近あまり家に帰って来ないってこと、もしかしたらお母さんは薬指にはまった指輪を取りがっているのかもしれないってこと。

「だからね、綾」

もしこのままお母さんを殴ったら、どんな気持ちができるだろうか。

指輪に傷がつくくらい激しく、力任せに。私は突然その衝動が湧き上がってくるのを感じた。それは今まで感じたことがないような強い衝動だった。

お母さんは頬杖をつきながら、つらつらと喋っている。内容はよくわからないのに、ただその衝動だけが大きく膨らんでいって、食べてもいない夕食が喉の奥からせり上がってくるような感じがした。心臓が体内で跳ね回った。彼女を殴ったときのあの快感は手の届くところにある。私はそれを選べばいいだけだ。それに触れられないもどかしさでどうにかなりそうだった。自分の丸い指をそつと伸ばして、それからずると母の頬にかざす。

殴ったあとあの言い訳も、謝る言葉も用意なんてできていなかった。でも殴りたかった。私を支配する衝動はそういう種類のものだった。

「ちよっと」

だがその手は届かない。

母の生暖かい手が私の手首を捉え、不審そうにこちらを見ていた。

「この手は何？」

束縛。母の目が私を捉え、柔らかく締め付けてくる。私はこの瞬間が嫌いだ。だってその瞳を見てると、どうしたってわかってしまうから。私はこの人から生まれたもので、少なくとも半分は同じだということ。

畳の上で向かい合う私たちは、多分お互いを見ていなかった。お互いが映し出す自分自身の醜さを横目で眺めながら、薄汚れた親子愛について考えていた。

「ごめんなさい。違うの。」私は突然あの愉しみをおあずけにされたことにやり場のない憤りを感じながら、ぞんざいに答えた。

「ちよっと手が伸びただけ。」お母さんはまだ私の手首を掴んでいる。言い訳にも聞かえないだろう。だがどうでもよかった。ぎりぎりまで快感を感じようとして引きつった脳がびくびくと痙攣を起こしていた。

「綾。」

お母さんは私の手から指を放して言った。

「あなたのために思って言ってるのよ。」

お母さんは夏休みの間できる限り私を家に閉じ込めて勉強させたがっていたみたいだけど私はとにかくさまざまな理由をつけてお姉さんに会いに行った。おばあちゃんは私が頼めばすぐに家から出してくれたし、そのほかにもたくさんのお姉さんをついた。どうしてここまでお姉さんに会いたいのかはわからなかった。それでも

私はお姉さんの髪から漂う檸檬の香りが好きで、お姉さんの白い肌についた傷を見るのが好きだった。

「お姉さんは自分の母親のことって好き？」

足をぶらぶらさせて問いかけると、お姉さんも足をぶらぶらさせながら答えた。

「好きだよ。」

「嘘つき。」

どうしてわかるの、とお姉さんは驚いたようにこちらを見た。「だって」私は肩に置かれた手を眺める。「その仕草、困ったときにいつもやってるから。」

お姉さんは黙っていた。何も言わなかった。おとなが嘘をついているとき、子供は何も言っはいけない。でも今日はどうしてか指摘したくなった。それは遂にお姉さんの顔にも赤い痕が侵食しはじめたからかもしれない。

「痛くないの？」

私は静かに問いかけた。

「痛いかもね。」

お姉さんは言った。

そのときのお姉さんは、何かを諦めた「おとな」の顔をしていた。「お母さんはね、私のためだからって言うの。お姉さんと会うのはやめなさいって。そんな人と関わらないで、勉強だけしてろって。」

私はお母さんの、湿った柔らかな束縛を思い出す。吐き気がするほど、いやな想像だった。綾のことを一番知っているのも、一番愛しているのも私。お母さんはそう言って私を抱きしめたけれど、それは違う。お母さんは何も知らない。人を殴ることに快感を覚える私の醜さは、この世界でお姉さんしか知らないのだ。私

だつてきつとそうなのだと思う。同じ屋根の下で暮らしているけれど、私たちを繋ぐ明確な証は血縁関係だけで、抱きしめた相手が自分の想像通りかなんてことを確かめる術はない。私は私がつくりあげた「お母さん」という像にお母さんを当てはめてはめていくだけなのかもしれない。

真つ赤に泣き出した地平線を見つめて、私は思った。

「愛されてるんだね、綾ちゃんは。」

お姉さんは思わずどきつとするような、冷たい声で言う。

「私は束縛してほしかった。」

はつとしてお姉さんの顔を見た。目尻に侵食した赤い痕と太陽の涙が、お姉さんの顔でも泣きそうな地平線をつくっていた。

それからお姉さんの顔にはいくつも傷が現れた。途中から私はそれを数えるのをやめて、その代わりに草や花を踏みつけることで一時的な欲求を満たすことにした。無残に萎れた植物を見ながら征服欲に水を与えていく。

でも一度味わってしまった快感を忘れることはなかなか難しく、気休め程度の破壊を続けながら、私は誰かを殴りたいという衝動を抑えきれずにいた。だから、自分以外のありとあらゆるものを傷つけた。

そんな時のことだ。

それはこの夏と言つても差し支えないくらいの大雨だった。

「綾、家から出ちゃだめよ。」

お母さんの声が台所の方から聞こえる。「おばあちゃんを迎えに行ってくるから。」

ああ、そう。いつてらっしやい。

口の中で小さく呟く。きつとお母さんはおばあちゃんを迎えに行くのなんて嫌でたまらないだろう。それでも行く。行かなきゃいけない。雨に打たれるのは大人の義務なんだつとお姉さんも言っていた。

窓に叩きつける他人の涙の音を聴きながら、雨雲ですっかり暗くなつた世界を眺める。雨は好きじゃない。誰かが泣いているときは知らないふりをして家の中にいるのが一番いいのだ。私はまだ無知な子供で許されるから。そう、出ていく気なんて全くなかつた。私の周りには約束された安息があり、そこから出なければ傷つくこともない。

じゃあどうしてあの日外に出たの。そんなことを言う人もいる。どうしてなんだろう。自分が走っている理由はよくわからなかつた。わからないけれど、ただなんとなく考えてしまったのだ。子供のくせに大人ぶるあのひとのことを。あのひとはきつと、義務を果たさない大人の代わりに大雨に濡れようとするだろうってことを。

自分の額にかかった雨を振り払って、ありつただけの力を込めて叫ぶ。

「お姉さん」

やっぱり、あのひとはそこにいた。

傘も差さずに、真つ赤な傷に雨が叩きつけるのも構わないで。迷子みたいな表情を浮かべながら、ただそこに立っている。

「綾ちゃんっ」

ゆっくりと視線が動いて、お姉さんが私を捉えた。心配だった。

このまま消えてしまふんじゃないかと思った。

「風邪引くよ」私は凍りつきそうな舌を動かして必死に言葉を紡ぐ。「傘入って、早く。」お姉さんは私に淡く笑つて、そして一歩

下がった。雨のひどい方へ。

「綾ちゃんこそ、濡れる。」

早く帰りなさい、まるで諭すかのよう。

私はなす術なく立ち止まる。どうすることもできないその無力さが信じられなかった。

笑っているはずなのに、傷ばかり。傷ばかりが目立つ。お姉さんの身体に降りかかる雨が、私はもう他人のものに思えない。それは誰かの涙じゃなかった。お姉さんの涙だった。

「殴りたい。」

突っ立っている私に近づいて、お姉さんはそう聞いた。「いいよ、綾ちゃん。」そして私の手にそっと手を添える。「ずっと。殴りたいんだらうなって、わかってたから、」

殴ってくれて、構わない。

お姉さんはそう言った。

「いいの？」

私はごくりとつばを飲んだ。

心臓がとくとく震える。誰かを殴りたくてたまらないという膨れ上がった欲求は確かな形を伴って私に牙を剥いた。目の前で跪き、目を瞑るお姉さんの肌はすごく柔らかさうだ。この肌に拳をめぐりこませたら、すごく気持ちいいだろうと思う。きっと私が求める何もかもを満たしてくれる。

でも、同時に何か引つかかかって、握られた拳が上手く振れない。

「大丈夫。慣れているから、大丈夫。もう痛くないからね。」

それはやっぱり、お姉さんが笑っているように見えないからだろうか。

雨がうるさい。うるさくて、冷たくて、頬を伝うそれは涙みたいで。痛みに慣れたとしても、心の中で愛されたいと叫んでいるこ

とは変わらない。

私がこのひとを殴ったら、そうしたら、そのあとやっぱりお姉さんは一人でその傷に絆創膏を貼るんだろう。誰の助けも求めずに冷え切った指じゃきつと上手く貼れないけど、それでも一人で。私は手を振り上げた。

お姉さんの瞳の色が、雨にいっぱい映る。たくさんの顔があった。笑ってたり、怒ってたり、色々だった。私はその中から本物を探した。

「できないよ」

振り上げた手が、がくりと垂れる。

本物なんてわからない。笑っていても泣いている、人間はそういう生き物だ。だけど少なくともお姉さんの涙に映り込む私の顔は、全く楽しそうじゃなかった。高揚感も興奮も訪れなかった。このひとを殴ったら、きつと一生後悔すると思った。

私たちはお互いに、迷子みたいな顔で見つめ合う。

「どうして？」お姉さんは傷だらけの顔で繰り返す。「どうして？」

「わかんない。」

私は持っていた傘をお姉さんに押し付けた。

「もう濡れちゃだめ。」

それだけ言って、私は駆け出す。宙ぶらりんになった手だけが惨めに汚らしく震えた。

私はそれからどうしてもお姉さんに会うことができなかった。怖かった。私にはお姉さんに会う資格がないように思えた。

八月終盤、東京に帰るという前日まで、私はずっと逃げ続けていた。

だから今こうやって歩いている今も、このまま踵を返して逃げ出

したくなる。感情の整理がつかない私は俯いて道を歩いた。

二週間前の大雨は凄じい被害が出たみたいで、家が倒れなかったのは奇跡に近いとお父さんが言っていた。木や花もだいたいぶ押し流されてしまったらしく、ここに咲いているのもひとつだけだ。私はなんとなく、名前も知らないその花に近づいた。

しゃがんで見つめる。青々としていて、素直に綺麗だと思った。踏んでしまおうかとも思う。少し前までは息をするようにやって来たことだ。でも今日はその気にはなれなかった。あの日から、私の燃えるような衝動はなりを潜めていた。

だからその代わりに、私はその花をぐっと力を込めて引き抜く。ごめんさいと頭を下げた。

虐めたくてやったわけじゃない。

やっとなを決めた私はそれを掴むと、弾かれたように勢いよく走った。そして、同じように叫ぶ。「お姉さん」

やっぱりほら、そこにいる。お姉さんはゆっくり振り返ると、少し驚いたように目を見開いた。「久しぶり、元気だった？」

うん、と小さく頷く。相変わらず傷だらけだった。強がり、自分の存在意義がこの傷だと思っている馬鹿なひと。ぜんぜん違うのに。

言いたいことがたくさんあって、混乱した頭のまま私は言った。

「あのね。私、明日帰るの。」

「じゃあ、お別れだね。」

お姉さんは少しだけ寂しそうに笑った。

「でも楽しかった。また来年も会いたいな。」未来のことを語るくせに、その瞳はなんの色も映していない。私が映り込む隙はない。私はそういうお姉さんが大嫌いだ。見ていて、苛々する。ひと思いに殴れたら気持ちいいのかもしれないけど、それじゃ何も変わ

らない。

私はお姉さんを見つめた。お姉さんも、私を見ていた。

「あげる。」

拳を作った手を傷つける代わりに、私は後ろ手に隠していた花を差し出す。

「私に？」

お姉さんは予想外のことに困惑しているようだった。「綾ちゃん。私に、くれるの？」

「そう。」

私は俯いた。迷惑だったかな。そんな考えが過ぎる。彼女も、お母さんも、私の周りにいるたくさんの不幸せそうなたちの顔が浮かんだ。誰かを笑わせることは誰かを傷つけることよりずっと難しいのかもしれない。

それでも、

「ありがとう、綾ちゃん。」

ずっと素晴らしいことは間違いないのだ。

私は顔を上げた。傷だらけのお姉さんの、不器用な笑顔が見えた。それは脳が震えるような快感じゃない。でも確かに、たくさんの人たちが呼ぶ「幸せ」がこういうものなら私は悪くないと思う。

「うん、本当に、ありがとう。」

お姉さんを見ていて、何かがすとんと落ちていく気がした。

誰かを傷つけたら、誰かに傷つけられたりしないとわからない。人間というのはみんな、とても不器用にできている。たった一つの感情を伝えるのにすごく遠回りをすることもある。

だから私は口角を吊り上げて、すごく格好の悪い笑顔を浮かべると、こう言った。

「どういたしまして。」